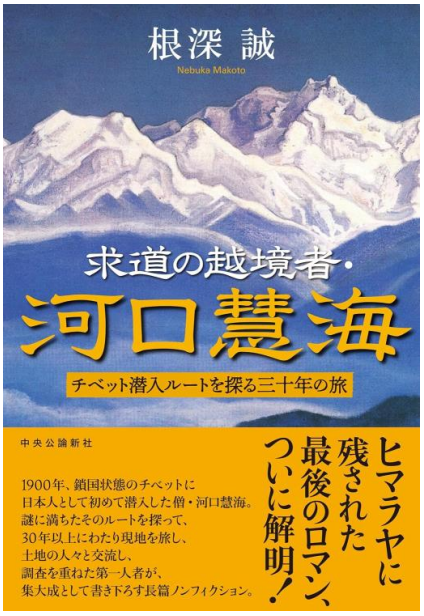
求道の越境者　河口慧海　チベット潜入を探る三十年の旅　（根深　誠著）



河口慧海は 1900 年（明治 33 年）我が国未伝の教典を求め、日本人として初めて秘境チベットに潜入した。当時のチベットは国を閉ざし、南のヒマラヤ山脈によって多くの探検家も容易に近づけなかった。しかし慧海はチベット語を学び日本人の身分を偽り、不屈の意志をもってヒマラヤを越え、ついにラサに至り、ダライラマにも拝謁した。二度にわたるインド・ネパール・シッキム・チベット行脚は 16 年にも及んだ。この経緯は口述筆記による「チベット旅行記」に詳しい。

著者は 1992 年に初めてドルポ地方を訪れ、河口慧海がネパールからどのようにチベットに入ったのか踏査する。実は「チベット旅行記」にはどの峠を越えてチベットに入ったのか書いてない。旅行記の記述と自分の目で確かめるしか方法が無かった。この本は 1992 年から 2022 年まで約 30 年に渡り慧海のチベット国境越えの峠を特定する踏査記録である。

著者は 2004 年に「河口慧海の日記」があることを知り、その日記を発見する。その日記にはかなり具体的にチベット国境越えの峠情報が書かれていた。ここまでチベット越えの峠探しは 12 年かかっている。しかしまだ峠を特定出来ない。

このかん、著者は自らのヒマラヤ登山活動やドルポ地方の鉄橋架設事業やネパール国会議員に立候補した日本人の支援活動など様々な活動を行っている。初めてヒマラヤに足を踏み入れて 49 年が経っていた。その間にシッキム３回・チベット 10 回・ムスタン４回・ドルポ地方に９回出かけている。そして 1992 年に初めてドルポ地方を訪れ、ネパール側からの踏査活動やチベット側からの踏査活動を行う。ネパールではマオ派から現金をかつあげされたり、2020 年のラサからネパール国境に探査活動に向かう著者への共産中国官僚による嫌がらせも詳しく書かれている。このような苦労を越え、慧海の日記のコピーを入手してから 18 年後の 2022 年のネパール踏査でやっと国境越えの峠を特定する。約 30 年に渡る長い活動に驚嘆する。

私がラサに行ったのが 2019 年８月だった。このときもライフルを構えた中国警察が町を暴力的に支配していたが、更に酷いことになっていた。

この本の素晴らしい所は、40 年前のネパール人やチベット人の暮らしをしっかりと描いている所だ。また彼らへの熱い想いが溢れるように描写されている。かつては徒歩でしか入れなかった集落への道が舗装され、中国製のバイクが入ってくる。電気も水道も引かれていなかった人々の暮らしが変わってくる。

しかしそこに暮らす人々への優しいまなざしが溢れている。

中央公論新社　2024 年２月 25 日発行　3000 円　（フカ）